

# 呉威廉牧師夫人 Margaret Mellis Gauld の思い出

## 劉慶理

小雨のしとしと降るボストンを出発したのは、5月2日（2002年）朝8時半であった。ボストン台湾基督教会会員20名がマカイ牧師故郷訪問のため、2台の車に分乗し一路 Woodstock, Ontario, Canada に向って行った。目的地に着いたのは夕方7時であった。陳俊宏長老が迎えて下さった。ホテルに荷物をおき、夕食をホテル近くのレストランでとった。

食後ホテル一階の広い食堂で参観予定地とその他の必要事項を陳長老がお話し下さった。説明が終わった後、陳長老が縦6寸、横8寸ほどの一枚の古い写真を出された。「この写真の中央に坐っておられる老婦人は呉威廉牧師夫人

(Margaret Mellis Gauld) です。その前に一人の小さい少女が坐っています。この少女は今皆さんの中で話を聞いておられる頼長老夫人です。」のんびり長老の話を聞いていた私はこの言葉にハッとした。私のことを話しておられる様だ。陳長老は何のためにこの写真を持ってこられたのだろうか。あとでわかったことだが、私たち一行が明日たずねるマカイ牧師のふるさとは、彼に続いて台湾初期宣教に尽くされた呉威廉牧師夫妻のふるさとでもあった。当の写真には呉牧師夫人と私が入っている。面白いかわりあいだと思い陳長老が持参されたのだろう。この写真は呉牧師の弟の孫のカナダの御宅で見つけたとのことである。この写真を通して私は呉牧師夫人との思い出を綴りたいと思う。

先ず陳長老の示された写真を私はそばによってよく見た。30名ほども撮っているだろうその人々の中央にドッシリ坐っておられる御婦人はまぎれもなく遠い遠い昔、私の小学校から女学校初期あたりまで常にお会いしていた呉威廉牧師夫人であった。その前に坐っている少女は私である。髪をうしろに2本に分け結んでいる顔は女学生初級の私だ。

その頃呉牧師夫人は台南新樓病院内の赤レンガ2階建ての宿舎にお住まいだった。呉牧師夫人の長女呉阿玉 (Gretta Gauld) は当時新樓病院の看護婦長であった。私は新樓病院がまだ現在の新式で立派に改築されていない頃の古い病院の門を過ぎあちこち点在する病棟と宿舎、そして緑の木々茂る庭を通って呉牧師夫人のお宅へ行った。やさしい温和な呉牧師夫人に迎えられ、ピアノレッスンを始めた。ピアノに向って弾く私、その左側に坐って教えて下さる呉牧師夫人、この場面を私は今でもはっきり脳裏にきざみつけている。数えれば約70年ほども昔のことだ。殆んど忘れ去られた私の幼い時代の平和な懐かしい思い出がこの一枚の写真を通してよみがえって来た。

呉威廉牧師 (William Gauld 1861-1923) はカナダ Ontario の農家に生れ、両親とも敬虔な長老教派の信徒であった。マカイ博士が台湾宣教から始めてカナダに帰国された折、故郷 London (カナダ Ontario 州) の Andrew's 教会 (現在 First Andrew's Church) で二回説教された。その話を聞いた当時20歳の青年。未来の呉威廉牧師がその帰り道マカイ博士の台湾宣教の道を歩みたいと、いっしょに

行った弟に自分の決意を語った。彼はトロント大学とノックス神学院を卒業し、1892年カナダ生れの Margaret Mellis、当時25歳と結婚し、2ヶ月余りあと台湾へ宣教師として夫婦で赴任した。それはマカイ博士来台20年後のことであり、教会は初期開拓の時期から建設と組織の時代に入っていた。1901年マカイ博士が亡くなり、呉牧師は北部教会の指導工作を行う重い責任を荷わされた。夫婦は31年という長い歳月を台湾北部伝道に尽され、1923年呉牧師は天に召された。

呉牧師夫人は天性音楽に秀で、その上教会に対する奉仕の使命感を強く持っておられた方であった。夫人は日々規則正しく淡水中学と女学校と神学院で器楽を教え、市内の教会、個人或いは各所で声楽、器楽を教えられた。土曜日曜には夫君と共に地方教会に出向き、音楽の指導、教友の訪問をされた。呉牧師夫人は時間を惜しんで仕事に打ち込まれる方であった。その頃台湾北部教会の賛美歌（聖詩）は文字だけで楽譜が印刷されていなかった。呉牧師夫人の音楽指導で台湾北部教会の音楽はめざましい進歩を遂げ、聖歌隊の活動が進み、台湾の中南部や日本まで音楽旅行に出向いたのであった。呉牧師夫人は『北部教会音楽の母』と呼ばれていた。夫人は音楽方面の慈母とたたえられたと同時に、教会内部においても慈母といわれた。それは呉牧師夫人が伝道者の家庭や貧しい信徒をよく助けられたためである。御自身は質素であったが精神方面、物質方面に不足する人々を補い慰め、病人の訪問など非常に熱心につくされた。

呉牧師が亡くなられた後、1931年9月呉牧師夫人は長女呉阿玉（Gretta Gauld, 上述台南新楼病院の看護婦長）と共に台南に来られた。呉牧師夫人に師事出来たのは私の幸運であった。幼い私がピアノを教えていただいたのは呉牧師夫人の寛大な愛の心によるものだと深く感謝している。

私が呉牧師夫人からピアノを習っていた頃、時には教会の青年の集りが呉宅で開かれていた。小さい私から見れば見上げるばかり背の高い青年達が客間に大勢居て、呉牧師夫人のお手製のバタの香り高いホームメイドクッキーを皆で食べていた。当時これ程おいしいクッキーをそとの店では売っていなかった。そのクッキーの思い出と共に更に呉牧師夫人を懐かしく慕うのである。

別の思い出が頭にうかんで来る。それはレッスンの途中時々呉牧師夫人が上をさして「二階にバークレー老牧師がお休みだから静かにしていきましょう」とおしゃっていたことである。それで私はご多忙な夫人が病人のお世話もしておられるのだとわかった。子供心にもおえらいと思った。父母からもバークレー老牧師のことは聞いていた。バークレー牧師はアモイ語辞典を編纂され、また聖書を台湾語（白話文）に訳された方である。

私は又教会の聖歌隊などでタクトをとっておられる呉牧師夫人を当時拝見したことがある。それは弾力と力強さに満ちていた。呉牧師夫人は絶えず働かれた。常々やさしく。いつくしみ深く、怒ることがなかった。それは御自身が神の愛につつまれ、周囲の人々をも神の愛でつつんであげることが出来た方であったからだ。呉牧師夫人には御自作の賛美歌（台湾語では聖詩）がいくつもあり今でも礼拝の時に歌われている。その二三を挙げると、聖詩317首「こと欠き望み失われし時に」や聖詩323首「憩いありや、世は艱難に満るに」などがある。

話をカナダのマカイ博士故郷訪問団が Woodstock に到着した 5 月 2 日にもどそう。翌日 5 月 3 日一行は朝食後、マカイ博士の故郷ゾラ (Zorra) に向かった。マカイ博士に関係ある数ヶ所の事跡をまわった後、呉威廉牧師がマカイ博士の説教を二回聞いて台湾宣教を志したという First Andrew's Church を訪問した。立派な黄金色に近いベージュ色で尖塔に十字架の輝く教会であった。その後呉牧師夫人の生まれ故郷 Kippen を訪ね、その父上が、かつて経営していた郵便局 (現在その建物はない) の向い側の芝生の上で陳長老の説明を伺い、すすめられるままに私は呉牧師夫人の思い出と感想を語ったのであった。

呉牧師夫人は 1867 年の生れ、1960 年この世を去られた。呉牧師夫人には特別台湾と関係の深い二人の娘さんがおられた。一人はすでに前に書いた長女呉阿玉 (Gretta) であり、私はこの娘さんに呉宅でお会いしたことがある。次女呉花蜜 (Flora) は女医であり、李約翰医師 (J. L. Little) と結婚された。李約翰医師は、新楼、彰化基督教病院及びマカイ病院の院長をつとめられた。夫婦には二人の娘さんがあり、長女李真恩 (Jean) は有名な童話作家として知られ、1962 年彼女の第一冊目の本『Mine for Keeps』を出版した時、カナダ童話書籍奨励賞 (Little Brown Canadian Children's Book Award) をもらった。真恩の童話書籍はカナダ及び世界各地の児童に歓迎されている。次女培翠 (Patricia) は母の姉、呉阿玉と同じく看護婦である。今でも真恩と培翠はご健在である。カナダ滞在が余計一二日あれば或いはこのお二人の姉妹にお会い出来たかもしれない。

ところで陳長老が提供された当の写真は、私の祖父の家「和源」の客間の前で写されたもので、1937 年呉阿玉が新楼病院の看護婦長の職を辞し、台北マカイ病院に赴任されるので、母上の呉牧師夫人をも迎えて、祖父が送別会に招いた時の記念写真だったらしい。写真には私の祖父、祖母、父、母、叔父、叔母、弟、従弟妹や他の方々写っており、新たに台南長老女学校の校長に就任された植村環牧師のお姿もその中であつた。

記念すべき写真をカナダの旅、即ちマカイ博士の故郷訪問旅行の折に示されたこと、この事によって別の一つの意義ある歴史を見つめ得たのは真に感慨深い。それは呉威廉牧師夫妻とその御家族がマカイ博士の跡を継ぎ、台湾人にキリストによる愛を広められた事跡を、一層はっきり知ることが出来たことである。

私の人生で最も美しい中の一こまが呉牧師夫人との思い出と共によみがえり、心は喜びと感謝で満たされている。この気持を永遠にもち続けて行きたいと望んでいる。ここで陳長老のご好意に改めて深く感謝するものである。

2002年7月記

